〔1268〕

氏名（生年月日）	永井暁行（ナガイ アキユキ）（1987年2月16日）
学位の種類	博士（心理学）
学位記番号	文博甲第124号
学位授与の日付	2018年3月15日
学位授与の要件	中央大学学位規則第4条第1項
学位論文題目	**友人関係を通した大学生の発達と適応** **―友人との二者関係におけるやり取りと傷つき経験からの検討―**
論文審査委員	主査　都筑　学
	副査　富田　拓郎・池田　幸恭

内容の要旨及び審査の結果の要旨

１．本論文の要旨

本論文は、約1,400名の大学生を対象として、2013年から2017年にかけて実施した面接調査と質問紙調査のデータにもとづいて、友人関係を通した大学生の発達と適応について検討したものである。

本論文は、図1に示されているように、3つの部分から構成されている。

第1章は、文献研究である。青年期の友人関係に関する先行研究について、友人との付き合い方や友人関係における傷つきという視点から概観し、研究の到達点と課題を批判的に検討することによって、本研究における以下のような2つの目的を示した。

第1は、傷つくことを避けるような付き合い方を志向する大学生の友人関係において、傷つくことを避けることによって適応的な友人関係が維持されることを明らかにすることである。

第2は、大学生が友人関係の中で傷つくことについて、傷つくという出来事を個別・具体的な事例として示すとともに、それが及ぼす発達的な影響について明らかにすることである。

第2章から4章は、実証研究である。面接調査（第2章）によって友人関係の変化と傷つき経験について探索的に検討し、そこで得られた知見について、①友人関係と適応（第3章）と②傷つき経験による発達（第4章）の点からさらに検討するという組み立てになっている。

第2章では、半構造化面接調査によって、大学生が感じている幼少期からの友人関係についての主観的な変化の過程を明らかにするとともに、友人関係の中で生じた傷つき経験がその後の友人関係や自己認識・評価に及ぼした影響について明らかにした。

第3章では、質問紙調査によって、友人との間でやり取りされるサポートの授受と個人のソーシャルスキルが、傷つきを回避する友人関係を取ろうとする大学生の適応を促進することを明らかにした。

第4章では、質問紙調査によって、友人関係の中で生じた傷つき経験が大学生の適応に及ぼす影

響を検討するとともに、過去のとらえ方と意味づけの違い、及び他者への相談や他者からの共感・受容の違いによって、傷つき経験の引きずりやすさが異なることを明らかにした。

第 5 章では、文献研究と実証研究の知見にもとづいて、大学生の友人関係が発達と適応に及ぼす影響について、総合的な考察がおこなわれた。

２．本論文の構成と概要

本論文は、全 5 章から構成されており、図 1 のようにまとめられる。

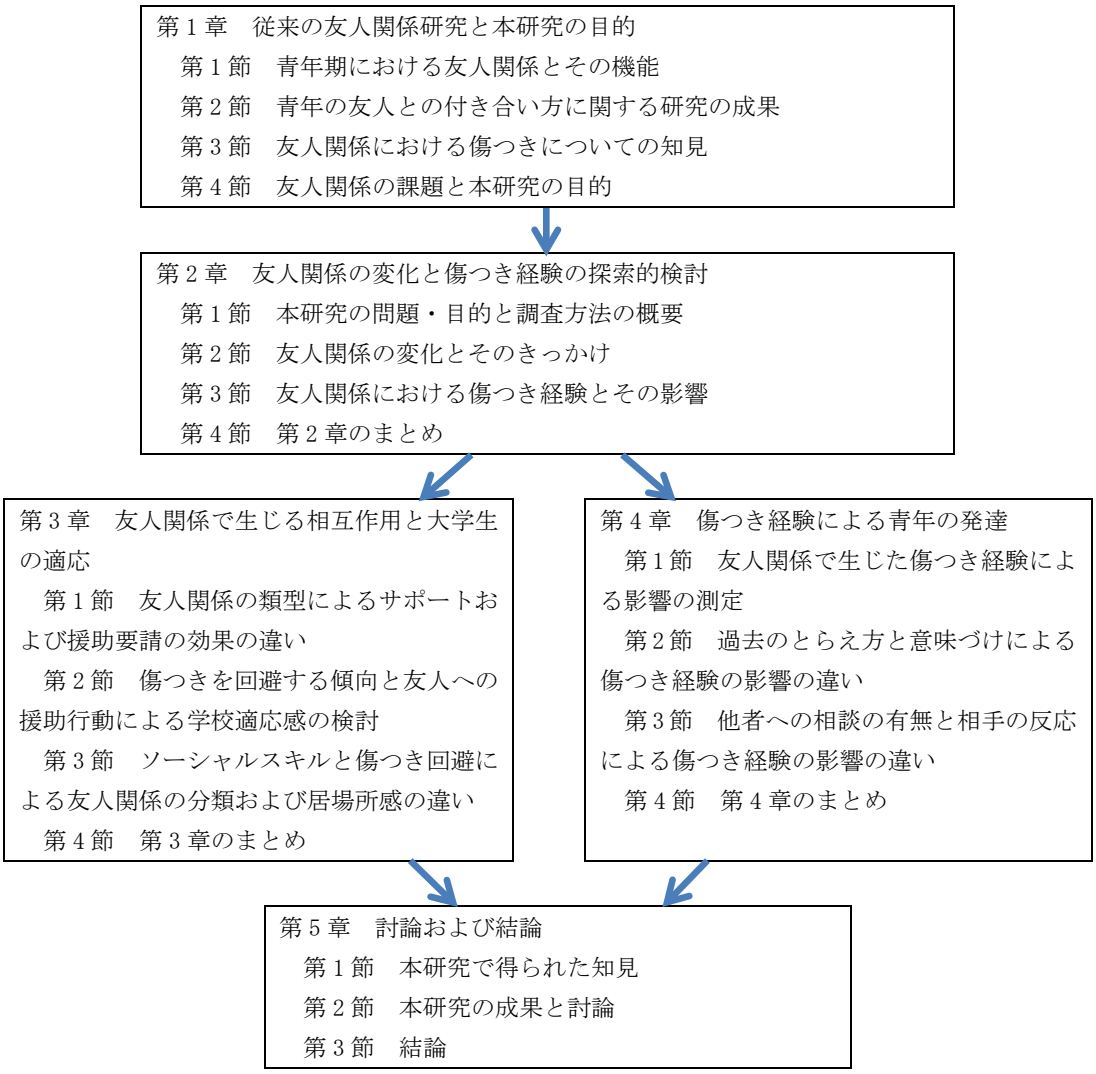

図 1　本論文の構成

第 1 章では、先行研究を以下のような視点から概観した。第 1 点は、青年期における友人関係とその機能についてであり、サポートの授受の相手としての友人関係やストレスや葛藤としての友人関係が論じられた。第 2 点は、友人との付き合い方についてであり、友人との心理的距離のとり方や友人への期待が論じられた。第 3 点は、友人関係における傷つきであり、傷つきとトラウマとの違いや傷つきの影響が論じられた。以上のような先行研究の検討を踏まえて、本論文における 2 つの目的が示された。第 1 は、傷つくことを避けるような付き合い方を志向する大学生の友人関係において、傷つくことを避けることによって適応的な友人関係が維持されることを明らかにすることである。第 2 は、大学生が友人関係の中で傷つくことについて、傷つくという出来事を個別・具体的な事例として示すとともに、それが及ぼす発達的な影響について明らかにすることである。

第 2 章では、16 名の大学生を対象に、半構造化面接を実施し、得られた逐語録をグランデッド・セオリー・アプローチ（GTA）を用いて分析した、第 2 節において、友人関係の変化については、「感情の変化」（友人関係の不快感情の増加、快感情の増加）、「接し方の変化」（関係の親密化や深化、内面の開示を伴う関わり方の回避、関わること自体の回避や拒否、関係の形成や維持に対する積極性の変化、連絡態度や関わる時間の変化、円滑な関係維持を目的とした変化）、「付き合う対象の変化」（付き合う対象の性別の変化、多様性の変化、友人の態度の変化、良好な関係の形成や出会い）の 3 つのカテゴリーグループが見出された（括弧内はカテゴリーを示す）。対人関係の変化が生じたきっかけについては、「自身の内的な要因」（自身の発達や成長、自身の言動や結果、時間の管理、友人関係への問題意識）、「関わる他者の要因」（他者との交流、新しい関係の形成、友人の成長や性格の変化、人間関係のトラブル）、「環境や状況の要因」（進学先の環境、友人との距離の隔たり）の 3 つのカテゴリーグループが見出された。第 3 節では、友人関係で傷ついた経験を語った 11 名の 16 のエピソードの分析にもとづき、傷つき経験を「積極的な分離」「消極的な分離」「非難」「裏切り」「からかい」「大切にされない、使われる、軽視される」「理不尽な扱い」「その他」に分類した。また、傷つき経験による影響や変化について、「感情の変化」（心理的な動揺、関係への不快な感情）、「対人関係の変化」（付き合い方の変化、友人関係の悪化や崩壊）、「経験からの学び」（対人関係への学び、自分自身の見直し）の 3 カテゴリーグループが見出された。面接調査の結果から、友人関係での傷つき経験は長期的な影響（対人関係における不信感や自己不全感）として現れる一方で、対人関係の見直しや友人への気遣いというプラスの面もあることが示された。

第 3 章では、3 つの質問紙調査の結果データにもとづいて、友人関係の中での相互作用が適応に及ぼす影響が検討された。第 1 節では、2 つの大学の 270 名の大学生を対象に、友人関係尺度（岡田，2007）と援助要請スタイル尺度（永井，2013）の得点にもとづき、①友人関係回避群、②傷つき回避群、③積極的関係群、④傷つきリスク群の 4 つの異なる特徴をもつクラスタが見出された。学校適応感（大久保，2005）に関して、友人関係回避群の得点は低かったが、援助要請自立傾向が高いと劣等感が低減されることが示された。ソーシャルサポートの受容が高いほど、傷つき回避群の学校適応感（居心地の良さや被信頼感・受容感）が促進されることも示された。傷つきリスク群

では、援助要請が強いほど、被信頼感・受容感が高くなることが見出された。第 2 節では、3 つの大学の 216 名の大学生を対象に、傷つけ合いの回避（岡田，2012）と援助行動が学校適応感に及ぼす影響を検討し、積極的に援助行動をするほど学校適応感は強くなり、傷つけられることを回避するほど学校適応感は弱くなる傾向にあることが示された。第 3 節では、5 つの大学の大学生 389 名を対象に、傷つけ合い回避尺度（岡田，2012）とソーシャルスキル尺度（相川・藤田，2005）の得点にもとづいて、①配慮・スキル不足距離確保群、②スキル標準傷つき無関心群、③スキル成熟傷つき回避群、④スキル不足傷つき回避群、⑤スキル成熟親密関係群という 5 つの異なる特徴をもつクラスタを見出した。スキル成熟傷つき回避群とスキル成熟親密関係群は、個人的居場所や社会的居場所（原田・滝脇，2014）をより強く感じていることが示された。また、傷つきを回避する大学生の中にも、ソーシャルスキルの高い者がいることも示された。以上のことから、友人とのやり取り（サポートの要請や受容など）が大学生の適応を支えていると考えられた。

第 4 章では、3 つの質問紙調査の結果データにもとづいて、傷つきを経験した青年の発達が検討された。第 1 節は、3 つの調査から成っていた。第 1 次調査では、49 名の大学生を対象に、自由記述式調査で、傷つき経験とその後の変化・影響への回答を求め、113 の記述を元に、「積極的な分離」「消極的な分離」「非難」「裏切り」「からかい」「大切にされない、使われる、裏切り」「理不尽な扱い」「その他」に傷つき経験を分類した。傷つき経験による変化・影響は、「積極的な対人関係」「消極的な対人関係」「受容的な自己」「否定的な自己」「傷つき経験の引きずり」「影響や変化のなさ」のカテゴリーに分類した。第 2 次調査では、4 つの大学の 317 名を対象に、第 1 次調査で得られた結果にもとづいて作成された「友人関係における傷つき経験の影響尺度」の因子分析をおこない、「傷つき経験の引きずり」「消極的な友人関係への変化」「自己価値の低下」「変化や影響のなさ」「新しい視点や態度の獲得」の 5 下位因子を見出した。第 3 次調査では、3 つの大学の 199 名の大学生を対象に、独自に作成された傷つき経験の影響尺度を実施し、傷つき経験は中学生の時の出来事が最も多く、現在から近い傷つき経験ほど、傷つきを引きずりやすく、現在から遠い傷つき経験ほど、新しい視点や態度の獲得や友人への気遣いの増加が見られることが示された。第 2 節では、4 つの大学の 317 名の大学生を対象に、第 1 調査で作成した傷つき経験の影響尺度、認知的評価尺度（加藤，2001）、過去のとらえ方尺度（石川，2013）、意味づけにおける同化・調節尺度（堀田・杉江，2013）を実施し、ストレスの評価が比較的強い傷つき経験（脅威・重要群 230 名）と比較的弱い傷つき経験（非脅威・重要群 66 名）をクラスタ分析によって抽出し、脅威・重要群が非脅威。重要群よりも、「傷つき経験の引きずり」の得点が高いとともに、「新たな視点や態度の獲得」や「友人への気遣いの増加」の得点も高いという二面的な特徴を示した。同時に、脅威・重要群は、過去を連続的・受容的な態度でとらえ、過去の出来事の意味を見出す同化がより強いことも示された。第 3 節では、3 つの大学の 199 名の大学生を対象に、傷つき経験の影響尺度、認知的評価尺度（加藤，2001）、知覚された相談相手の反応尺度（高橋，2013）を実施し、第 2 節と同様に、クラスタ分析によってストレスの評価が比較的強い傷つき経験（脅威・重要群 131 名）と比較的弱い傷つき経験（非脅威・重要群 55 名）を抽出するとともに、相談相手の反応に関する受

容群（26 名）、受容・助言群（60 名）、反応不十分群（41 名）と相談なし群（59 名）を分類し、受容群は相談なし群よりも「傷つき経験の引きずり」得点が高いことを見出した。受容・助言群は相談なし群よりも、「自己評価の低下」の得点が低く、「新たな視点や態度」と「友人への気遣いの増加」の得点が高かった。以上のことから、傷つき経験を親しい他者に相談し、相手から反応が得られれば、傷つき経験のネガティブな影響は低減し、ポジティブな影響が増すと考えられた。

第 5 章では、第 2 章から第 4 章までで得られた知見をまとめた上で、そこから明らかにされた大学生の友人関係を通した発達と適応の特質について以下のように論じた。傷つくことを回避しようとする青年の中にもソーシャルサポートの高い青年がいて、彼らは必ずしも不適応的な特徴を示さない。傷つくことを回避しようとする青年でも、友人関係の中でサポートの要請と授受ができれば適応感が向上し、友人をサポートすることによって劣等感も抑制される。友人関係の中での傷つき経験は、それを引きずり、友人に対して消極的な態度で接するようになるというネガティブな影響をもつとともに、他方で、視野の広がりや友人への配慮といったポジティブな影響をも与える。本来否定的な意味合いをもつ出来事である傷つき経験を肯定的に受けとめるためには、過去の意味づけに積極的に取り組んで肯定的にとらえたり、他者に相談したりすることが有効である。

最後に、本研究において残された課題と今後の研究の方向性が述べられた。

３．本論文の評価

本論文は、大学生の友人関係を通した発達と適応に関して、友人との二者関係におけるやり取りや傷つきという視点から検討をおこなったものである。本論文は、先行研究を綿密に検討し、半構造化面接調査と複数の質問紙調査を重ねていくことによって、大学生の友人関係を通した発達と適応について、実証的に明らかにしている。大学生を対象とした発達心理学の研究に新しい知見をもたらした点で、高く評価できる。本論文の独自性をまとめると、以下の 2 点に集約される。

（1）本論文では、大学生の友人関係を検討する際に、友人に対する意識だけを対象とするのではなく、友人との間の実際のやり取りという行動を組み入れて研究した。このことは従来の研究には見られない独自性であり、面接調査のデータにもとづいて新たに作成された友人関係における傷つき経験の影響尺度を用いて、実証的な検討を積み重ねていった。それらを通じて、友人関係におけるサポートの授受・相談が、傷つき経験のポジティブな評価とその後の適応につながる可能性を示すことができた。このように、本論文で用いられた意識と行動の二つの側面から友人関係にアプローチする研究枠組みは、友人関係研究に大いに寄与するものである。

（2）本論文では、友人関係の中での傷つき経験に注目して、面接調査と質問紙調査を組み合わせて丹念に実証研究を進め、傷つき経験をその後も引きずるというネガティブな側面だけでなく、それまで持っていなかった新たな視点や態度につながったり、友人への気遣いを増加させたりすることを明らかにした。一般に、友人関係の中での傷つき経験はネガティブなものだと思われがちであるが、傷つき経験には発達的な契機も含まれるという新しい知見を示し、心理学研究に付け加えることができた。このように、傷つき経験の持つ肯定的な意味を実証的に見出した点に、本論文の独自

性がある。

以上のように、本論文は上記の２点から高く評価できる一方で、次のような問題点も含まれている。
（１）本論文で用いられた調査方法は、友人関係を一時点あるいは回想的に検討したものであり、友人関係の変化やその影響をさらに研究するためには、縦断的な調査を用いることが求められる。
（２）本論文で検討された友人関係における行動は、大学生が思い浮かべた「行動」であり、今後は、友人関係における具体的な行動指標を取り上げて研究を進めていくことが必要とされる。

ただし、上記の諸問題は、今後さらに研究されていくことが十分に期待され、本論文の独創性や学問的価値を損なうものではない。

以上を総合して、本審査委員会は、本論文を博士（心理学）の学位を授与するに値するものと認定する。